

末野野

すぐろの

3月号 (通巻871号)



耳寒し

姫娑羅の冬芽のちから静かなる
裏道の瀬音風音耳寒し
寒林や沼を覗けば己ゐて
真直ぐなる道なき枯野犬連れて
波郷句碑据ゑ冬ざる一騎塚
冬空や旧家守る柿樹齡百
クリスマスリース二階の子の玄関
父母遠しわが誕生の十二月

松本三千夫

(名譽主宰)

冬紅葉

大仏のみ手に休めり冬の蝶
歸り花和尚と庭の立話
わが声のくぐもりて池凍てにけり
木枯の吹きおろしたり鐘の音
昼酒に少し冗舌年の暮
熱爛や齒に衣着せぬ仲間うち
湧水に鯉の群れをり冬ぬくし
冬紅葉出で湯のつなぐ溪の径
一灯に浮ける羅漢や冬の菊
鳶鳴けば鶏の鳴き冬うらら
艶やかにより色つけぬ青木の実
城跡と言ふ低き山冬椿

黒滝志麻子

(全巻)

冬木の芽

ゆくりなき日和なけけり冬紅葉
横たはる鏝濃き錨小春風
山茶花の咲きつぐ勢ありにけり
大路ゆく男ゆらゆら大熊手
こまやかなる配置の妙や冬木の芽
こだはりを引きずつてをり夜の寒き
冬ざるる一色で足る野も山も
自動ドア開くや寒さのどつどどと
切株に園丁の昼冬の鴟
納会の雨のやさしき冬至かな
釣銭に鱗貼りつき年の市
手回りの乱るる机辺去年今年

森

清

(副主筆)

堯

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

留拍子

岡野里子

能楽堂冬蝶終を舞ひたるや
白障子奥より能の留拍子
竹灯炉点り時雨の石畳
紙漉や槽底の闇搔き立てて
対岸の灯点滅海冴えて
海神の懐へ入り冬落暉
日面に残る紅葉や無縁塚
潮の香の染みたり軒の掛大根
首の骨こきり勤労感謝の日
サルビアを眉睫に待合室の椅子

恙妻

田中臥石

鯨焼き妻へ半分根深汁
一枚の月曆揺る隙間風
厚着妻の受診番号明滅す
病状に安堵の吐息白かりき
病廊に妻を待ちをりそぞろ寒
息白く散歩早めり恙妻
石路の花歩みて触るる向う脛
山茶花の庭より妻の見舞客
鯽提げて片言妻と交しをり
単線の遮断機下りぬ冬田道



掛大根

森清信子

富士の嶺と湖光り合ひ大白鳥
竹林の町騒隔て三十三才
枯蓮の百態鳴らす疾風かな
阿夫利嶺をぐんと引き寄せ掛大根
海原の光る一枚冬鷗
小春日や挨拶の声弾みをり
残照の影絵めきたる冬木かな
大雪や暁闇の栗鼠さわがしき
冬日燦富士に向き干す子の道着
参道は風の浄土よ小六月

冬深む

安齋久英

山肌を尾根をしまくや冬の霧
怒濤音崖にはじけり石露の花
山影を映せる湖や冬深む
明け方の橋に霜置く中洲にも
波がしら眠る山裾打ちつづけ
冬椿肩よせ合へる島の墓
白鳥や羽音ゆらりと着水す
吹き溜る巨福呂坂の落葉かな
凍てきびし源平池の黙深め
山陰の昏きに映えて櫨紅葉

街師走

石黒興平

冷まじや腰越状のかすれ文字
聞き役の腹立ててをりおでん酒
高張の華やぐあかり酉の市
蕨戸を開けたるままの時雨かな
おほかたは小暗きところ花八手
鳶の音や海へ傾るる蜜柑山
未練とも潔ぎよしとも枯蓮
小春日や髭題目の跳ね具合
街師走動く歩道を足早に



乙 矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



枯野 高木邦雄

山茶花の散り敷く園や汀女句碑
沖合の漁火滲む初時雨
冬木立箒目著き法の庭
瑞垣のかそけき声や三十三才
うす墨に遠富士暮るる枯野かな
文開く障子明りの六畳間
町騒の遠き庭園冬薔薇

木守柿 堺昌子

冬木の芽 今村千年

山茶花の盛りや庭のまくれなぬ
いやませる空の蒼さや木守柿
冬芒戯れの風ほしいまま
麦の芽の二寸のびたる青さかな
誕生日孫この手にあまる冬の薔薇
冬麗ハミングで和すわらべ唄
観覧車より富士さがす冬の昼

そろく句友卯月十六氏を悼ふてふ名乗ひとときは星流る
もののふの都や確と冬木の芽
ふと触れて心ときめく冬木の芽
江ノ電の曲がる先先小春風
タブレットのゲームに夢中しめいはい七五三祝
頬つぺたを赤く染めたり夕焚火
探し当つる露地の古井戸一葉忌

暮れ早し 及川照子

軋ませて閉づる城門暮早し
語彙貧しく辞書繰る指の寒さかな
むつつりの羅漢を抱き山眠る
庄内の畑や媪の頬被
老木の毅然と見ゆる冬木かな
思ひ込め五年日記を買ひにけり
振り向けど人ぬぬ風の冬木立

白障子 岡田史女

つはぶきの黄の燦然と一葉忌
伐り積みの竹の青さや十二月
鼓打つ音の洩れくる白障子
綿虫や寄木細工の店先に
討ち入りの日なりざはめく枯蓮
義士祭の耳打つ風のあらあらと
やはらかき雨や天皇誕生日

焰 小田嶋野笛

窓近く立冬の薔薇しづかなり
貧乏神の居据つてゐる神の旅
常連の一番風呂や花八手
牡丹焚く焰は青き花となり
百枚の田のきらめけり朝の霜
風向きへ罎を張りなほし冬の蜘蛛
淋しがる猫を炬燵に入れ寂し

一葉忌 加藤静江

野路菊の白や古刹の磴の罅
さびさびと涸びし水車朴落葉
菊坂の冬日ななめや一葉忌
伐り口の湿りを残し冬櫻
水琴窟の音色伝はる冬晴れて
浮く群と潜く群継ぐ鳩
雨意の風冬毛の栗鼠の跳びゆけり

青炎集

黒滝志麻子選

横浜 布施由岐子

錆色の葉の落ちぬまま冬に入る

溶岩の痘痕の面や散紅葉

説明長きビールの試飲日短

ダッシュするスマホとマスク始発駅

角刈りの満天星紅葉散る歩道

大雪ともなればさすがにそれらしく

横浜 鍋島武彦

棚田なほ稲刈り今も鎌頼み

己が名を呼ばれてみたし文化の日

落日や枯野の果ての日本海

ストープを囲み地の酒地の肴

日記買ふ花の余生を夢見つつ

熨斗袋買ひおく老いの年用意

横浜 正谷民夫

オンザロックの氷からりと憂国忌

轍跡の乾ききつては冬となる

極月の音の乾ぶる寛かな

継ぐ炭の箸の重たき夕ごころ

鴨眠る沼の払暁霧動く

鳩と鴉の罪の軽重街師走

横浜 山口登

相伴の鱒酒二杯座の弾み

千円にて万両を買ふ老舗花舗

休診と張り紙のあり医者の風邪

静もれる無住寺灯す石露の花

霧深し富嶽麗姿を隠しをり

にぎわい座の落語に浸る文化の日

横浜 戸田澄子

松手入れ筋金入りの老庭師

黄落やこんなに空が青いとは

観音にほほゑみ貰ふ小春かな

夢多き新元号や年名残り

庭師来る庭中小春日和かな

住む丘に煙突一軒クリスマス

横須賀 大川暉美

岬鼻へ風が風追ふ芒徑

軽き音踏みて山路や落葉道

時雨るるや海より暮れて安房の山

冬紅葉玻璃に映してカフエテラス

菊坂に残る質屋や一葉忌

丁寧に洗ふ漬樽冬日和

横浜 五十嵐富士子

山の端の日の春くや冬紅葉

手に掬ふ水に空にも散紅葉

寒空や連結長き貨車の音

灯台の廻りを包む枯尾花

風の音と光無尽の枯野かな

商店街へ吸ひこまれゆく師走かな

横浜 太田良一

跳ぶ雲や神馬使はぬ神の旅

教会へ懺悔の道や枯木星

枯蓮の源平池や夕日影

残照の池や番の浮寝鳥

吉良の首洗ひし井戸や冬鴉

留守電に見知らぬ声や隙間風

横浜 池谷鹿次

切干や夕星光り晴つづき

地下街に人吸はれゆく寒さかな

通らねばならぬ道なり虎落笛

扁額の古き山門冬紅葉

引き潮の残す砂紋や月冴ゆる

里神楽神木影を重ねをり

横浜 大霜朔朗

散策の皇居一周文化の日

遊行寺の銀杏落葉や大円に

冬晴やこも水車は修理中

今風の齋は折詰め冬ぬくし

風呂焚きの薪の大小火吹竹

小銭入れの膨らむズボン冬ぬくし

横浜 外山生子

暖冬や銀杏黄葉の今盛り

里山のふもと笹鳴くつづげさま

小春日や水琴窟の音まろし

不器用に生きて八十路や枇杷の花

厨事早起きの子のちゃんちゃんこ

木枯や街のぬくもり攫ひ去り

耕 土 集

森清

堯選



空耳のムンクの叫び冬没日

鼻息の荒き輓馬や雪煙

冬 of 海戦なき世を願ふ父

山茶花や子ら歌ひつつ通ふ道

寒干両床へ飾りて客を待つ

横浜 久島しんの

横浜 渡辺美智子

心解くココア一杯冬立てり
小春日やベンチ一つに一人つつ

野良猫と語る幼の小春かな

煩惱の有りてこそよと帰り花

柿落葉一葉ひと葉にある個性

生牡蠣やのどに残れる三杯酢

寒鰯や妻に供へてより手酌

気になるや曆の果の右さがり

息白し豊洲市場のゆつたりと

煤払神も仏も天も地も

太田 鈴木小弥太

横浜 飛田 典子

今朝の冬ぞろ歩きにつまづきぬ
冬ぬくし猫のびのびと岩の上

冬田道師と歩みつつ得る教へ

冬天と川光り合ひ鷺の舞

餅搗や去る年号を惜しみつつ

あかときの鳥語のはるか花八手

岡よりの目路の港や冬かもめ

出港の巨船にまとひ冬かもめ

帆船の白に徹する寒さかな

海図室の丸窓二つ冬日差

横浜 小原 紀香

横浜 小池 桃代

大根引く農夫に絡む大型夫
夕暮の筑波の里や村時雨

山鳥じつと見てをり木守柿

家中の軋める音の寒さかな

干大根きるにきれない人の縁

返り花

小川 玉泉

(名誉顧問)

妻愛でし白きつつじに返り花
投函へ初冬の朝日眩しめり
早朝の鳥の声満つ実千両
千両の紅を深めて夜雨去る
風止みぬ師走半ばの青き月
根元より切り詰め庭の枯れ芙蓉

雑記帳 20

例年と異なり、今年にはわが国にとって天皇陛下の皇太子殿下への譲位という、国家的行事が行われる。世界一の最短詩型の俳句を通じて、心からお祝いを申し上げたい。